

女
男 1
男 2

薄明かりの中、役者、1分沈黙

最後15秒間、飛行機の音。

女、男2、飛行機の音終わり、鼻歌

(ポーリュシカ・ポーレ)

男1 ハレーションは網膜へ、ガラスのウィンドウの向こう、その向こう、地平線の向こうから、蜃気楼に揺れ、徐々に迫り来る大きな影。照りつける太陽の強さに、私は、それが何なのか、見定める事も出来ず、目を、見開いている。ただ、目に映るのは、影と、光、青く光に透ける、あれは、あれは、何なのか？ 私は、どうにか、確かめようと、何度も目を凝らし、目を閉じ、顔を伏せ．．

1つのテーブルと3つの椅子。

顔を伏せている、男1。

一つのテーブルの上には、水槽が置かれ、少量の液体に浮遊する夥しい金魚、その底に

沈む幾つかのグラス。

その傍らには、手紙の刺さったグラスが、また幾つか用意されている。

女と男2、席に着き、目前の人間に話しかける様に、会話が始まる。

男2 どうします？
女 そうしましょう。

男2 いけませんか？
女 いいえ。

男2 君の好きなようにするといい。

女 私は、それを頂きましょう。

男2 (店員に返事するかのように) ソーダ水と手紙を。

女は立ちあがり、グラスに水を注ぎ出す。

女 起きなさい、朝食ですよ。

母へと移行した女は、食事の支度に取り掛かる。

男1が、空ろに顔を上げ。

男1 夢から覚めても、夢のまま、どこまでも、この悪夢がついて回る。

女 いつまで寝ているつもり、お父さんも起きているわよ。

男1 (水槽の傍で目を見据え) まるで、天地が引っ繰り返ったようだ。(誰かが歩いてくる、それに気付いた様に、床を這いずり) 一口でいい、どうか、何か食べるモノを・・・

女 (テーブルに皿を置く様子) ほら、今日はフワフワのオムレツよ。

男2は、テーブルに置かれたオムレツヘナイフを入れる。

同時に男1が、床に置かれた目の前の残飯に食らいつく。

女 そんなに急いで食べなくなたって、誰も取ったりしませんよ。

残飯を奪い合い、身を翻し、動き回る男1は、椅子の傍に滑り込む。

ナイフの落ちる音。

女 ほら、また落としたりわね。(テーブルの下に置かれたお玉を拾い上げる)

女は、お玉で水槽を一回しすると、グラスと手紙を取り出し、用意する。

男2 ギャルソンに拾わせ給え。

男1 (一瞬直立後、席に着く)・・・。

男2 どうなんだ、計画の方は。指示通り進んでいるか？

男1 はい、体制は万全であります。

男2 (口元から骨を取り出す仕草) 民衆が革命を唱え始めた、事を迅速に進めなければならぬ。

男1 (皿の上に目をやり) はい、

女は、手紙とグラスを男2へ手渡す。

男2 (手紙を一瞥し) 内地からの手紙だ。

男1へ手紙を渡しに向かう女。
後、幾つかの手紙とグラスを用意しておく。

男2 あまり進んでいないではないか。飲み給え、極上のワインだ。(と、女に渡されたグラスを傾ける)

男1 ・・・。

男2 お前は、何処の生まれだ？

男1 台湾であります。

男2 そうか、だが、今や我々は、同じ国に忠誠を誓う同士。そうだろうか？

男1 はい、・・・そうであります。

男2 我等が祖国に変わりはない。(グラスを持つ手を上げる)

男1 ・・・はい。

女は、男2のグラスを下げに向かった。

男2 お前には骨がある。やり遂げ給え。

男1 ありがとうございます。

男2 (徐々に立ち上がり)我々には、帝国国民として、果たさねばならぬ義務がある。祖国を愛する者の運命が、この戦いに掛かっているのだ。

男1 祖国。

男2 (声を張り)そう、祖国だ。

男1 (立ちあがり)我等の！

(腕を振り歌う)おお、我等は行かん、希望を胸に、泣くな娘よ・・

男2 (歌前) そうだ、旗を持って、我等が祖国の為立ち上がるのだ。

男1は、出陣するかの如く旗を振りかざす。

女 博士、準備が終わりました。

男2 ホルマリンを用意しなさい、実験を始める。

男1が、クロスⅡ旗をテーブル(自らが座っていた椅子)へ広げる。

女Ⅱ店員は、ボトルから金魚鉢へ水を注いでいる。

男1 何してるんですか？

女 水を換えておくよう言われたので。

男1 残りのクロスはどこに？

女は、クロスを男1へ手渡す。

男2 ソーダ水と、手紙を。

女は、男2へ、グラスと手紙を渡しに向かう。

男1は、他のテーブルへも、クロスをかける。

男2 (手紙を一読みし)これは、私宛ではありません。何故、この手紙を私に？

女 宛名なんて、ここに在る手紙にはありません。

男2 もう一枚手紙を。

女 それとも、あなたは、誰かの手紙を待っているのですか？

飛行機の音(日常の飛行機音から戦場音へ)

男1は、先程渡された手紙を読み始めると、

男2の傍らに座り込み、手紙を眺めている。

男2は、飛行機の音に気付くと、手紙を懐へ収め、銃を構え、見張りをする。

女は、水槽の傍でペンと紙を取ると、椅子へ赴く。そして、手紙を書いている様子で、男1の台詞に乗り移る。

男1 あなたに手紙を書くのは初めてです。私の手紙は、あなたのガラスのレンズとなって、どんな景色を見せるでしょうか？

女・・・見せるでしょうか？ そちらの日常は、どうですか？ あなたは今、ここから遠い僻地に居る。それでも、私の目の前には、あなたが、そうして、笑顔で立っている。あなたはいつでも、私の傍にいる。あなたの目にも、愛する人の笑顔が、愛する祖国の景色が、きつと、映っている事と信じます。

女は、書き終わった手紙をグラスに入れた。金魚を取り出し、ボトルに残った水を注ぐと、既に糸の通った針を金魚に刺していく。

男1 替わります。
男2 ああ

男2 紙、貰えないか？
男1 とおの昔に無くなりましたよ。
男2 手紙がよく届くそうじゃないか。
男1 煙にするような紙は在りません。

男1、おもむろに手帳Ⅱ手紙を取り出し、破り出し、煙草を作り始める。

男1 日記ではありませんか。

男2 ああ、いいんだよ。誰が読むでもない。(煙草を作りながら)

男1 内地で待つ人がいるのでしよう。

男2 内地など、幻想だ。幻想など描くな、描いたところで、所詮、手に届く事など無い。

男1 こんな毎日だからこそ、幻想を抱かないのですか？

男2 今、こうして広がっている現実が、その昔、俺の幻想だった気がするよ。同胞の死の前に、私は、(作り上げた煙草を見)復讐を誓った。あの日、唐突に雨が降り出した。

雨の音(銃声の様に一発づつ雨の音がしたか)かと思うと本降りとなる)

男2も、銃声に気付く様に銃を構えた。

弾丸が、男1の腕に当たった、腕の一部が、腕章の様に赤く染まっていく。そして、撃とうとするが、躊躇している様子。

男2 何をしている。何故撃たない、

男1 私は、・・・私の弾は、とおの昔に無くなりました。
男2 弾なら幾らでもある、あるじゃないか、そこにも。

急げ、敵が迫ってきたぞ。

男1 もう、ここは危険です、早く逃げましょう。

男2 逃げる？ その弾を抉り抜いてでも撃つのが、

今、お前のすべき事だろう。

男1 私達は、共に生きて帰らねばならないのです。

男2 撃たなければ、また、お前の赤い腕章目掛けて、飛んでくるぞ。

男1 今は、それが、先決。さあ、早く。

雨が止んでいく。

男2 は水槽の傍で、煙草に火を付ける。

男2 今はな、そう言っていられるのも、今だけだ。

男1 どういうことです。

男2 俺は、煙草を飲まなければならぬ。

男1 このまま、内地へ帰れずとも良いのですか。

男2 言っただろう、(タバコの火を振りかざし)

これが正義、これが、私の、復讐だ。

戦闘機の音がし、サイレンの音が響く、と、

男1 (音と同時に) 防空壕へ待機しろ。

大型プロペラが上空を勢い良く通過した。

男2、水槽へ煙草を差し出す。と、間もなく、闇に包まれる。ゆつくりと、赤く灯る煙草の火が降りていき、消える。

薄明かりの中、家族が浮かび上がる。そこは、防空壕とも見て取れる。

男2 父、女 母、男1 息子、闇の中から、浮かび上がる。

息子 父さん、父さん、何処に居るの？

父 父さんは此処だ、すぐ傍にいる。

息子 未だだろうか、まだ、外に出てはいけない？
あの飛行機、まだ、この上を飛んでいる？

父 聞こえるだろう、あの音が。もう少しだ、あともう少し。嗚呼、けれども、母さん、母さん、どこにいるの？ 母さん？

母 大丈夫よ、母さんはいつもお前の傍にいます。けれど、お前は、遠くへ行ったっきり。

戦闘機（編隊飛行）の音が響く

雷のような衝撃に身を崩す、男二人。土を掻き分け、外へ出ようとする。

女は、手紙を読み始める。

大型プロペラが通過したかと思うと爆弾の落下音が響く

徐々に、男二人の世界が赤く染まって行く。

女 雷が、一度に何十も落ちたかと思う程の大音響が轟き、島全体は地鳴りし、泥と熱風が頭から降り注いだ。爪に食入る砂に耐えながら、外へ這い上がった時、目にしたものは、悪夢のような光景だった……

赤く染まった悪夢の世界に、男二人が飛び出した。

男1 （女の読む手紙に乗り移る）……悪夢のような光景だった。あなたの眼に映る私は、もう私では無いのかもしれない。何日も何日も、熱砂の中で夢見てたのは、いつも、君の似姿だった。けれど、もう私には、一体何に涙すればいいのかも判らない。私は、来る日も来る日も、この悪夢の中で、足元の蛆を、踏み潰し、それに驚く事も無く、行進しているのだ。

男2 空が白い雨雲に覆われ、砲弾が、雨の如く降り注いだ。全ては、一瞬で、引き千切れ、ガラスの破片が、

人々の胸を貫き、また、別の破片が、私の顔を映し出していった。

男1 もう、こんな祖国を、映してくれるな。

悪夢の世界に身を置く、男1は、男2と女に目を見張る。

男2は、兵隊の如く部屋へ上がりこみ、銃を構えるように、消火作業をする様子。

女 (手紙を読む様に) ・ ・ が確定され、記者会見

が行われました。変わって臨時ニュースです、昨夜未明、大阪府、大阪市のホテルにて、大規模な火災が起りました。多数の死傷者が出ており、現在も尚、消火作業が続けられている模様です。

キャスターの読みが火災ニュースに変わると、機械音が響き、シャッターを切る音に乗り移る。

女、覆い尽くす火に悲鳴を上げ、逃げ惑う。

それは、押し入ってきた兵隊から逃げる様。

男1は、息絶えた女を揺すり起こす。

男1、手紙をグラスに入れた。

赤いライトは消え、カフェの灯かりへ移ると、シャッターの切られる音が終わる。

女、起き上がり、リモコンを持ち、TVのチャンネルを変える様子。

男2、タイプする人間に言葉を連ねる様子。

女と男1は、TVを見るかの様に、水槽越しに、男2を眺めている。

男2 12月28日、彼女は何をしていたのか、

果たして何処で、ホテルの一室で、どのように灯は点灯し、誰と、どの様に姿勢を崩していたのか？

彼女は知らない、彼女の知らない彼女を、彼女の身体は知り、その身体の最後を、誰が知っているのか？

男1 ドキュメンタリーですか？
女 何故？

男2 ドラマなくして、ドキュメンタリーは成立しない。

男1 この間の火災ですよね？

女 ドラマよ。あなたがこの人を信じるのなら、ドキュメンタリーかもしれない。

男2 事実を、撮影し、編集し、放送する、それが私達の仕事だ。

男1 あなたは一体何を真実だと思われるのですか？

男2 前へ出る！

男1 前へ出る。

女は男1から渡された手紙をグラスに入れ沈めると、重りと繋げ、静める。

男2 おい、貴様、今なんと言った。

男1 では、私は一体、何を信じて戦えばよろしいのです。私は、祖国に忠誠を誓い、祖国を守る為

ならば、玉碎も厭わぬ覚悟でありました。なのに・・
男2 お前は何も判ってはいない。これが、祖国の為、上からの通達なのだ。

男1 何故、彼等を連れて行かねばならないのです。どうして！

男2 どうしても、どんなにしてもだ。そんなことで祖国が救えるとも思っているのか。お前は、そして、撃たなかった。

男1 あの時、私には、弾が残されていなかった、それだけではありません。

男2 いや、お前は諦めたのだ、裏切ったのだ。

男1 違います、我々には我々の戦方があるのです、

どうか、彼等と共に戦わせて下さい、連隊長殿。

男2 上からの命令だ。お前には、別の指令、が用意されている。その上、既に負傷しているではないか。

男1 この腕の、一つや二つ。(銃を構えるが、赤い腕章に手を当て)あうっ!

男2 まだ弾を抜いていないのか。所詮お前は、血と涙に生きているのだ。

女 その水が、毛穴という毛穴に入って、細胞という細胞の間に流れ込み、原子の粒を掻き分けて、ナノの粒子となったらば、君のその目に見えざる物に。

そして、そうすれば、ナノの粒子は心の臓まで溶け入って、涙となって、また水になる。

男1 (水槽のもとで)確かに、私はプラスチックじゃない。

男2 涙を見せるとは、恥じを知れ、感情ではない、計算しろ、計算するんだ、そう、互いの気持ちを

計算しろ。記号で、記号で表せ、カガク出来なきゃ話にならないぞ。

女 博士、

男2 何?出来たか、よし、見てみよう。

男2、女、金魚鉢の中を覗き込む。

男1、金魚鉢を両手で掴み。

男1 01001・10・0001・(呟き続ける)

男2 死んでいるではないか。(金魚を掴み)

女 支持通りしたのです。

男2 私は殺せと言った憶えはないぞ。

女 闇夜に放った一発が、どこかの誰かに命中し、空に放った一発が、どこか、だれかの石榴を割った。

男1 俺が、殺したんだ、俺が、俺が。

女 どうかしら、ほら、あの手も。

男1 確かに、あの時だけだった。

男2は握られた拳を開いた。

女 ほら、赤いでしよう。私達だけじゃあない。

男2 (金魚を水槽の中に投げ入れ) 何を言う、お前達が実行手段を誤ったのだ。やり直した、実験は失敗した。

女 指示通りしたから死んだのではないのですか？

どの様な指示を与えたのです。

男1 縦に、斜めに・・・斜めに、縦に、逆さまに、・・・うつ伏せに、仰向けに、・・・

男2 君達には、クチン収容所俘虜兵のサンダカンへの移送を命ずる。

男1 これは、一体、

女 死んでいる。

男1 (頭を抱え) 沈んでいる！

男2 B C級戦犯、B C級戦争犯罪人、お前のした事、

お前に刑を言い渡す。

男1 違う、違う、全てはあなたの仰られるままにした事、

男2 捕虜兵への虐待、虐殺、残虐行為の責任の追及、により、その実行者である君に終身刑を命ずる。

男1 やっていかない、いや、やったのかもしれない、けれど、そう仕向けたのは、あなたではないですか！

長官殿！

男2 だまれ！上官の言う事は、天皇の命令である

ぞ！天皇の命を受けぬつもりか！

女 今あなたも見たでしょう、ガラスの向こうに沈む現実を、こうして見世物にされている人々を。

レンズが記憶した、ドキュメントを。

男2 全ての物証はそこに揃っている。そこにある事実、その赤い腕章が、何よりの証拠。

男1 彼等は私の同期の桜、私も共に散る運命。ならば、あなたは、なんなのですか！

女 事実と事実を繋げれば現実が出来上がるといふ寸法。

男2 私はただ、君達に事実を伝える義務が在るのです。

女 では、今仰られたのは全て真実であると、そういう事ですね。

男1 では、今回の計画の遂行は、失敗では無かったと。

女 では、

男1 では、

女 救済であると、

男1 どうなんですか、

女 どうなんでしょうか？

女、男1はマイクを男1へ向け、迫って行く。

ロックを外す音

マイクは銃へと変わり、男2は、しゃがみ込み、怯えている。

男1、女は、男2の腕を掴み、前方の椅子へ座らせる。

男1 || 監視員、男2 || 捕虜兵、女 || TV局

女 では、このカメラに向かって。(水槽越しに座る)

男1 (銃を構えながら) 氏名、出身地、家族構成。

男2 これは条約違反だ、判っているのか、条約に違反している。

女 では、敵兵の死体を引きずり、その映像を放送する事は、違反していないのですか？

男1 その条約を盾に、あなたは我等から祖国を奪った、そうして、あなたは、戒厳令をしくのです。氏名、出身地、家族構成。

男1、銃口を男2に向けながらカメラの横に立つ。

女 怪我をしているのですか？

男1 ええ、ここに一発、残っています。

男2 それで、私を撃つつもりか。

男1 あなたを撃つつもりなどありません。だから、こうして、撮っているのです。

飛行機が通過していく

女は、金魚とグラスを繋げ、沈めながら唄を唄う。

女（唄） あの目見たのは飛行雲

遠い彼方の飛行船

どこへ行くのか、誰が乗るのか、

それは、私の思うまま、

頭上に浮かぶ白線を、

ただ見上げては、思うまま。

あの空からはシャトーが見える

クライマックスも見渡せる

女 重りが沈んで、偽者の魚もこうして浮かぶ。

男1 イトを通し、重りが沈んで、沈んで、・・・

ここに沈んで居るのは？

女 あなたも読んだ手紙です。

男2 インクと紙と、どちらが先に溶けるでしょうか？

女 肉と血潮と、どちらが先に腐るでしょうか。

男1 ここに映る世界は、

男2 ドキュメント / 女 ドラマです。

男2 では、この金魚は。

男1 手紙に綴られたインク。

女 いいえ、あなた自身。

男1 雨はあがる。私達は、見渡せる、きっと、

クライマックスを。

男1、男2、女、ポーリュシカポーレ合唱。

歌 おお、娘よ我等は戦う、
行く手を阻む砂塵に、目を見開き進め

我が頭上の白線の果てに／し無き、
地平線へ伸び、広がる／消える
今、目に映る雲を／事実

男 1

ただ、目に映るのは、影と、光、あれは、あれは・

男 2、女、独唱

我等は読み上げる、白線に綴られた言葉
ポーリュシカ、ポーレ
風よ吹け、揺れよ、
一筋の雲が残した、君へと宛てた手紙。

止めど流る涙の行方の

女は、手紙を手にし舞台後ろに立っている。
そして、徐々にバックライトが光量を上げる。

ジ・エンド